子』の一篇々々を自分なりに校訂しつつ讀みすすめていた。それは週末に「金谷研究室」において行われるマンツウマンの演習に備えてのものであった。三十年餘の昔である。「あとがき」によれば、著者はその以前から『管子』に惹かれ興味をもたれていたという。長年のご研鑽である。心からの敬意をもって本書の上梓を慶祝する次第である。そしてこの創見に滿ちた本書が、今後多くの研究者に熟讀玩味され利用されることを願って稿を了えたい。

一九八七年七月　東京　岩波書店
A5版　三八六頁　五〇〇〇圓

田中麻紗巳著
両漢思想の研究

池田秀三

近年、漢代思想に關する研究著作が次々と出版されている。町田三郎『秦漢思想史の研究』（一九八五年一月）、日原利國『漢代思想の研究』（一九八六年二月）、本書、そして内山俊彦『中國古代思想史における自然認識』（一九八七年一月）である。評者が研究を始めたころの寥々たる狀況を思えば、まさに隔世の感があり、斯學に從事する者としてまことに喜びに勝えない。本書の著者田中氏をはじめとして、困難な環境の中ですぐれた成果を擧げられた諸氏に對してまず敬意と祝意を表させていただきたく思う。

さて、これら著作の中において、本書の特色の第一として擧ぐべきは、書名にも明示されているように、前漢・後漢兩期を考察の對象としているということであろう。すなわち、上述のものも含めて從來の類書のほとんどが武帝期ないし前漢末までしか取扱わないのに對し、本書では後漢にも前漢と同等の比重が置かれているのである。もっとも、後漢思想研究がこれまで皆無であったわけではない。個別的論文はいま置くとしても、まとまった著作として古くは狩野直喜『兩漢學術考』があり、また日原氏の書でも後漢部分にかなりの量が割かれている。しかし、狩野氏のものはもともと講義原稿であって、前半が前漢、後半が後漢を主とすることからうかがえ

るように、講義の順序として前漢をやったから次は後漢という便宜的一面があり、兩漢思想を一體のものとして意義づけてはいない。實際のところ、その論調はむしろ兩漢の差違を強調するにある。また日原著は遺稿集であって、明確な體系性を有しているとは言い難い。收められた概觀的論説によって、漢代思想全般に對する同氏の見方は推定されなくはないが、氏自身による漢代思想の特質の定義、あるいは兩漢の體系的把握は文章としては殘されなかった。

從って本書は、兩漢思想を一まとまりのものとして把え、それを意圖的に取り出した研究としては最初のものであり、ここにこの業績の劃期的意義がある。

しかしこの本書の意義は、ただちに重大な疑問となって返ってくる。と言うのは、本書の體系的骨格があまりよく見えてこないのである。つまり、著者の漢代思想に對する思想史的展望・構想が明確に把握できないのである。その結果、期待していた漢代思想の特質とは何か、という問に對する答も、讀み取ることが十分にはできなかった。これは私の讀解力不足の然らしむるところではあろうが、著者が自己の體系を表面に打出すことを意識的に控えた（と私には感ぜられる）ためであることもまた否定できない。言うまでもなく、自己の圖式を優先して資料をそれに割りつけていくやり方は有害無益であり、愼重にそれを避けて事實をして語らしめようとする著者の態度は納得できるし、實際、隨處に著者の見解がさりげなく語られてもいる。だが、前述のごとき本書の意義を考えれば、もう少し鮮明に自らの構想・體系を表明されてもよかったのではあるまいか。

從來の研究が董仲舒もしくは前漢末までで終っていたのは故なきことではない。町田氏や內山氏の著に明瞭に提言されているように、思想史の上からみれば、戰國末から秦をへて董仲舒ないし前漢末に至るまでが一時期をなすとする説が有力であるからである。著者はこれに對して、儒學を中心に据える立場に立って、兩漢を董仲舒で二分する説を批判する。すなわち兩漢を、儒學の發展より完成に至るまでの一まとまりの時期とみなすのである。漢代が儒學の時代であることは今さら言うまでもない常識であり、著者の立場はもとより決して不當なものではない。しかし、兩漢の儒學・經學に大きな相違があることもまた明白な事實である。從って、今や漢代を儒學の時代とする常識を持出すだけではほとんど意味がない。漢代を儒學の時代と言うなら、現在必要なのは、兩漢學術の差異にもかかわらず、その根柢に一貫する理念・思考・パッション等、つまり一言で言えば漢代儒學の特質を明らかにすることであろう。そしてその闡明は、漢代思想の體系的把握なくしてはあり得ない。斷っておくが、著者が何の體系ももたず、ただ單に舊常識に倚りかかっていると言っているのではない。著者が同樣の意圖と抱負を有していることにはまったく疑いがない。が、それなればこそ、漢代儒學に對する概括が明言されないことにもどかしさを禁じ得ないのである。

まず結論めいたことに筆が走ってしまったが、以上が私の本書に對する第一の、そして最大の所感である。以下、各章を個別に見ていこう。まず目次を掲げておく。

序　説
第一章　董仲舒と『春秋繁露』

序
第一節　董仲舒を中心にした漢代の自然觀
第二節　『春秋繁露』考察
一　五行諸篇
二　離合根等三篇
第二章　劉向・楊雄
序
第一節　劉向の災異說
第二節　楊雄と王莽・新
第三節　『法言』と春秋學
第三章　後漢の儒學
序
第一節　『白虎通』の三綱說
第二節　賈逵の思想
第三節　許愼と古文學
第四節　鄭玄「發墨守」等三篇の特色
第四章　何休の思想
序
第一節　兩漢の外戚觀と何休の解釋
第二節　「進」からみた夷狄觀
第三節　災異解釋
第五章　道家思想
序
第一節　「鵩鳥賦」と『莊子』
第二節　武帝期の黃老派沒黯

第三節　後漢の道家思想

目次を通覽してまず感じるのは、その清新さであろう。ここに取り上げられた思想家や書物の多くは、著者によって初めて本格的研究がなされたものである。第二・第三章の各論がそれにあたり、また第一章や第四章のように、從來から研究されてきた思想家についても著者は新たな視點から考察を行っている。これらは未開拓の分野に進出し、かつ獨自の立場を打立てようとする著者の意欲を示すものであり、そのパイオニアとしての功績は永く記憶に留めらるべきものである。ただそのことは一方では、期待がはぐらかされた感を抱かせぬでもない。つまり、從來の漢代思想研究の中心課題が直接に論じられないもどかしさを感じるのである。たとえば董仲舒においては、政治思想（儒家としての）や倫理思想はほとんど論じられておらず、また天人相關や陰陽說についても全體的な考察はなされていない。劉向・揚雄についても同樣であるし、また許愼・鄭玄を扱うなら、それぞれ『說文』『三禮注』をこそまず主題とすべきであったろう。さらに第五章では、『淮南子』に關する專論がやはり欲しいところである。もとよりこれは望蜀の嘆ではあるが、これらの項目がうめられていれば、先に述べた體系性の不足という不滿も恐らくほぼ解消されていたであろうと惜しまれる。

さて前置きが長くなったが、以下各章および各節を簡單に紹介していこう。

第一章第一節は董仲舒を中心に漢代の自然觀を總括的に考察したものであり、その狙いは非科學的とかたづけられる漢代自然觀の思

惟としての意義を再評價するにある。まずこれまでの董仲舒の自然觀に對する研究を歴見して、董仲舒に機械論的感應説の存在することを確認する。次に『春秋繁露』同類相動篇を詳細に檢討し、彼が、自然と人間とは陰陽を共有しているから、共鳴現象が必然であるがごとく兩者の感應は必然であり、從って降雨は可能であると考えたという。しかしこの推究＝演繹は科學的客觀的とは言えず、また實效性ももたなかった。そこで天に救いを求めることとなり、ここに機械論的な感應説と天の作用という異質なものが併存することになる。このような感應説は、陰陽によって異質な關係を等質視しており非合理論ではあるが、一面では複合的で有機的な認識と稱し得る獨自の自然觀であった。彼が荀子の自然と人間の分離に逆行してかかる自然觀をもったのは、現實の災難から免れようとする切實な願いによるものであり、現實重視の姿勢に根ざしているのである。かかる能動的・全體的自然觀は讖緯の神祕主義に合流せず、また王充的合理主義にも至らず、もっぱら災異解釋の理論として劉向・班固・王符らに繼承されてゆく。災異解消については結局實效性をもち得なかったが、古代中國醫學の基本認識の形成において效用を發揮した。

以上の著者の概觀は基本的には妥當なものと言え、今後の漢代自然觀研究の共通の前提となり得ると思われる。ただ私には、機械的感應の一面を強調しすぎる嫌いがあるように感じられる。自然と人間の等質性相互性が繰返し説かれているが、陰陽による自然と人間の全體的統一的把握という點においては漢と以後の時代に相違はない。漢代の自然觀と宋學のそれとの質的差異はどこにあるかは、この論文からは見えてこない。私見では、漢代自然觀を漢代的たらしめているのはやはり天の思想であると思う。故に漢代自然觀の考察には機械論的感應説とともに天の性格の檢討が不可缺であり、本論は一方に偏している憾みが殘る。「前者が主で後者は補助的でしかなかった」（一九頁）とは簡單に言い切れまい。「兩者の共存は異質なものを包括する一種、總合的な考え方でもあった」（同上）ともいわれるが、共存の事實を指摘するだけではあまり意味があるまい。重要なのは、それがいかに總合されているかを明らかにすることである。著者が機械論を強調するのは、董仲舒の宇宙觀は目的論であるとし、機械論的側面を過小評價ないし無視する中國學界の主流を批判してのことであり、それはそれで意義のあることなのであるが、それならばかえって天と機械論の總合の實態を論じてほしかったと思う。また天について、著者は主宰者と定義するが、この概念はやや曖昧である。人格神と見なしているのだろうが、實はそれも大きな問題であることも附言しておく。また著者は、陰陽説による自然觀を「複合的」認識とするけれども、これにも少しとまどいを覺える。人間を自然全體の中に包攝し、かつ陰陽説は二元論だから複合的とするようだが、陰陽は二つで一つの相對相依的機構であって、互いに獨立した原理ではなく、嚴密な哲學的意味において二元論と呼べるかどうか。私などは、「異質な關係を等質視する」陰陽説はむしろシンプリファイの思考法だと思うのだが。さらにまた、董仲舒には現實重視の姿勢があって能動的積極的であり、荀子とは對蹠的であるというが、この説も首肯しかねる。董仲舒が他の思想家より現實重視であったと認むべき資料はとくにあるわけではない。著者は限田法の主張を證據として擧げるが、それはむしろ現實と遊離した觀念的發言とみることも不可能ではなく、他の思想家

に同様の發言を見出すのも困難ではない。すなわち荀子においても現實的な政策の提言は多く見られるし、私の理解するところでは、その天人の分の思想とは、人間の自然に對する能動的働きかけの主體性を確立するものであった、というのが通説であろう。著者の説はこの通説に反するわけであり、まずこの點について十分に説明しておく必要があったであろう。いずれにしても、董仲舒の自然觀を現實重視の姿勢によるものとするのは倉卒であり、根據薄弱と言わねばならない。最後に、著者は漢代の自然觀を非科學的と切捨てるのではなく、中國的な獨自の思惟として評價すべきであると力説するが、この主張は私もまったく同感である。ただ、中國醫學における實效性を評價の理由として持ち出すのは、かえってその主張を不徹底なものにしはしないであろうか。思想の價値は、本來實效性とはまったく無關係なものなのであるから。

第二節は、從來より董仲舒の原著に非ずと疑問視される『春秋繁露』の一部について、その内容に檢討を加え、改めて董仲舒との關係を考えたものである。

まず一では五行に關する諸篇を取上げ、五行對第三十八・五行之義第四十二・五行相生第五十八・五行相勝第五十九の前四篇と、五行順逆第六十より五行五事第六十四に至る後五篇とに分類した上、各篇それぞれの思想的特徴を分析し、『漢書』董仲舒傳等との比較によって、「前四篇の内容は、董仲舒との結びつきが少し考えられ、五行相生・相勝説を用いて德目・官職を説くものであり、後五篇の内容は、董仲舒との結びつきが見當らず、相生・相勝の考えを採用せず、ほぼ時令説を用いて災異をいい、『尚書』系の災異解釋の文と合うもの」（四七頁）と結論する。

本傳等の説と類似した部分の有無だけで『春秋繁露』各篇の眞僞を決めることは危險であり、なお多くの考察を必要とするが（著者も十分にその點を心得ていて、愼重に斷定は避けている）、その方法が眞僞決定の最も有力な手段の一であることは疑いない。よって本論は今後の『春秋繁露』研究、さらには前漢災異・時令説の解明に資するところ少なからぬ好論と言えよう。

次に二は、離合根第十八・立元神第十九・保位權第二十の三篇について考察したものである。まず三篇によく現れる君主の「神」と無爲について考求し、それは君主が自己の内心を隱匿しながら臣下の特質を精確に掌握するという神祕的機能を保有しつつ、臣下に效果的に事を委任し確實に成功を得ようとする實利的なあり方であるとする。このような「神」の考え方は、『韓非子』揚權篇・馬王堆漢墓帛書老子乙本卷前古佚書・『淮南子』主術訓にも見え、それぞれ異なる面はあるものの、これら黄老思想と三篇は近い關係にある。一方、三篇にはまた道義重視の儒家的思考も存在し、それは對策文に比べて客觀性や思索の深さで劣るが、基本的に董仲舒の思想と合致する。以上より、著者は、これら三篇は經驗や思索のいまだ深からぬ、そして盛んに各派の學説を吸收していた若い頃の作と推定し、さらに「神」の考えが天譴説の天へと發展していったと結論する。

本論もよく資料を讀みこんだ論文である。三篇の思想分析は、著者の論究でほぼ盡くしていよう。その基本思想が黄老であることは明白である。だが、董仲舒の若書きと定めることにはにわかに贊成しかねる。漢初における儒道混淆は珍しいことではなく、その儒家的部分をただちに董仲舒に結びつける必然性は薄い。その他の根據

も蓋然的なもので、決定的證據とはならない。まず何よりも、對策に描かれる君主像と三篇のそれとの乖離が大きすぎる。もちろん著者のいうとおり、董仲舒に年令による思想の變遷はあったろう。が、根本的な發想というものはそれほど變化しないものではあるまいか。「神」から天への進展という措定も、同樣に私には疑問である。「神」と天とでは、その基本的性格に大きな違いがある。かように性格の異なる兩者をストレートにつなげてよいものかどうか、不安が殘る。確かに著者のいうように君主の「神」は天に比擬されているが、ある觀念の根據づけに天を持ち出すことは學派を問わぬ常套の手段であって、黃老の天と儒家の天とを同一線上に並べることはできない。用語や枠組の類似をもって思想の進展や系統をあとづけることはもとより思想史研究の常法ではあるが、その實行には細心の注意が要求されよう。ここでの著者の結論には、性急との印象をぬぐえない。やはりこの三篇を董仲舒の作とすることには、やや無理があるのではなかろうか。もっとも著者は三篇を彼のものとみるという前提で出發しているのであって、その前提をもととすれば、著者の解釋は非常に巧妙なものと言わなければならない。『春秋繁露』のなるべく多くの部分を董仲舒の筆とみなす立場も當然認められるはずであり、その意味では、本論が有意義な試みであることを決して否定するものではない。

第二章は、前漢末から新にかけての二大思想家たる劉向と揚雄を論ずる。まず第一節では、劉向の災異說を機構（構造）と機能（目的）との兩面から考察し、漢代災異思想の中での意義づけを行っている。機構面から言うと、彼の災異說には『洪範五行傳』・象數易・陰陽（氣）・天の四つの理論があり、それらが並用されて災異解釋がなされる。基本となるのは『五行傳』で、易・陰陽は補助的に用いられる。この段階においては、その災異說は人事に對應する結果とする機械論的色彩が強いが、劉向はさらに天を用いて災異に前兆としての性格を與えている。つまり全體として、彼の災異說は、董仲舒などに比して「論證の複雜化・緻密化によって說得力の強化を圖り、「前兆の意味を加えることで、災異の持つ意義を深めている」（七四頁）と言える。しかし彼はあくまで前兆の段階に止まり、豫言には進まなかった。「より客觀的な性格を備えようとした」（同上）からである。機能の面では、董仲舒を繼承して君主の權威と道義性を求めており、儒家的立場に忠實であるが、その基には劉漢王朝永續の願望がある。このような劉向の災異說は、曆運を取入れて漢王朝の命運を論ずる當時主流の災異論とは異なる別の一つの流れであり、そしてこの流れは神祕的要素の少ない魯學派と密接に關連したものであるとともに、後漢古文學を育てる基礎ともなった。

本論は明快という點において、本書中屈指のものであろう。初出の折、名論と感嘆した記憶があるが、いま讀み直してもその印象はほとんど變らない。もっとも、研究の進んだいまの眼から見れば、いくつか問題點が生じてきている。たとえば、劉向の學問は多學派にわたっていて魯學に限定できないこと、齊學は讖緯思想、魯學は非神祕的と單純に決めつけてよいかどうか（ここには、災異解釋の客觀性・主觀性という評價規準が妥當か否かという問題も含まれる）、『說苑』に見える災異否定の合理主義的思想との矛盾をいかに解するか、等々である。これらの問題點の解決には、劉向の思想全般、さらには漢代災異思想全體の總合的考察を俟たねばならないが、著者には是非ともその解答を示されるよう希望する。

第二節は、揚雄の王莽・新に對する評價を考察している。前半は「劇秦美新」を取り上げ、まずその成立を始建國二年と考證したのち、そこに敍述された王莽の事蹟を逐一檢討して、その結論として、「美新」はやむを得ず作った單なる贊美の文でも面從腹背の作でもなく、是々非々の客觀的立場に立ちつつ、具體的歷史的に王莽を賞讃したものであるとする。その評價の理由は、「古文家學說に依據したとされる彼の姿勢、禮敎のゆきわたった儒敎國家と、大地主の介在を廢して直接に自作小農民層を基盤とする社會とを目指すその姿勢」（八八頁）にあった。後半は『法言』終末の二章、すなわち王莽を稱えた例の文章を分析し、揚雄が曆運の考えによって漢から新への交替を必然のものと認め、かつ兩朝を連續性あるものと把え、その禪讓を肯定していたとみる。そしてそのように新を支持するのは、王田制實施などの王莽の改革に儒家として贊同したからであるとし、さらにその贊同の根柢に哀帝期の狀況への失望に對する反動があるという。またその道家的傾向を班嗣等と比較し、それは失意の中にある體制內儒家知識人が思想的に深化させていったものであり、「根本的な認識の次元で『老子』や『莊子』の思想に依據しながら、儒家の敎理を實踐において評價する」（一〇二頁）と解している。

本論は內容豐かな好論である。揚雄が王莽の儒家的施策に大きな期待をかけ、心底より彼を贊美していたことは、まったく疑いを容れぬところである。このような明白な事實をいま改めて論議しなければならない狀況自體、私にとって不思議なことだが、決定版とも稱すべき本論によってこの問題には終止符が打たれた、と斷言してよいであろう。また道家思想の受容に關する考察も、非常に興味深い。私個人としてはその論旨に全面的に贊同することはできないが、この考察より與えられた示唆はまことに多大であった。今後の漢代道家思想研究において必讀の文獻となると思う。

私が本論に對してもつ疑問——あるいは違和感と言うほうがよいかもしれない。そしてそれは本書全體についても感じることなのだが——は、一つ一つの思想のあり方を現實の事象に卽應させすぎではないかということである。むろん社會的現實が思想を形成・規定することは確かであるが、思想はまた一方でそれとは直接關わらぬ複雜な樣相も呈するものでもある。失意だから道家、期待に滿ちているから儒家、といった單純な圖式では律しきれまい。そもそも揚雄が現實に目を向けた積極的人閒であったとする著者の人物像そのものが、私の揚雄のイマージュと食違っているようだ。彼が未來に意欲をもち、積極的に活動したことは確かにそのとおりだが、彼は結局のところ、少なくともその晩年においては、自己の內に沈潛し、自らの描く古典的理想世界の中に安住する觀念型人閒ではなかったろうか。それ故にこそ、實際の社會狀況から遊離した王莽の非現實的政策に贊同したのである。自らの理想が表面上實現されたことに醉っているのである。從ってその王莽贊美は、己れの出自階級に有利という冷靜な判斷からなされたものではない。階級的立場が一切作用しなかったとは言えまいが、自覺的な階級意識が存在したとは私にはどうしても思えない。もっとも、著者が誤っていると言うのではない。これは兩人の描く揚雄像や「現實」という語への理解の差異によるものであって、感想的批判にすぎない。著者の一貫した揚雄把握の有する客觀的價値は決して減殺されるものではないことは言うまでもない。

第三節は、『法言』に見える春秋説を検討する。結論のみを記せば、「『公羊』を正統視してその説を多く採用し、『左傳』の性質を知りながら主に史實に注目し、そして『穀梁』の解釋も理解していた」（一一四頁）となる。この結論は穩當であり、そこに至る實證もまことに堅實である。ただ本當の問題は、そこから先にあろう。かかる春秋學の性格は、恐らくは多くの知識人に共通するものと思われる。たとえば著者自身も指摘するごとく、劉向の春秋學も、結論的には揚雄とまったく同じである。とすれば、兩者の思想の相違が那邊よりくるかということとともに、思想と學問の絡みを闡明することも必要となってくるであろう。もっとも、それはかかる基礎作業があってはじめてなされるべきことであり、その意味では、本論は今後多く果されるであろう同様の作業にとっての典範たるを失わぬであろう。

著者はまた、揚雄の春秋説採用がその忠實な祖述ではなく、自分の立場に都合よく合せてのものであるといい、それよりして什一の税制も、「前漢・王莽期の税法や土地制度に對する自分の意見の表明」であり、「儒家の傳統的な考えを敎條的に説いたものではない」（一〇九頁）と述べ、彼の現實への關心を力説する。前半には異論はないが、後半は私には疑問である。その理由は先ほど述べたとおりである。なお考證は前述のとおり大變手固いが、寡見篇「説理者莫辨乎春秋」の「春秋」を經ではなく『公羊』であるとするのは行きすぎであろう。ここの「春秋」は、傳を背後に有する春秋學全體をいうとみるべきだが、經か傳かというなら、それは明らかに經を指している。『漢書』藝文志と比較するのは無意味だし、孝至篇の「春秋」が『公羊』であることと結びつける必要もない。「春秋」があるいは經を指し、あるいは『公羊』を指すことは前漢の常態であって、同一書だからといって統一する必要はないと思う。

第三章は、後漢儒學の四つの事例研究である。いずれも初めに述べたように類例の少ない研究であり、その意味で、本書中の主部と稱せよう。少なくとも私個人にとっては、最も興味深い部分であった。

第一節は、『白虎通』三綱六紀篇の「三綱」の思想的系譜とその漢代的意義を論ずる。その系譜は二流あり、一つは君臣・父子・夫婦それぞれが絶對的な上下關係であるとともに、君の下に父・夫が位置づけられた君主權強化の思想であり、『韓非子』忠孝篇等の法家や『孝經』より繼承するものである。この流れにおいては、綱は「すべまとめ」の意味を有する。もう一つは、君臣等の關係を變務的道德的な結びつきとみる思想で、これは先秦儒家の考え方が『春秋繁露』基義篇において陰陽説によって理論化されたものである。この流れにおいては、君と父との關係などはあまり嚴密には考えられていない。また綱は「結びつき」の意味である。結論として、『白虎通』では前者を主柱としつつ後者を補完的に用い、冷嚴な上下關係を儒家的に潤色しているとする。

本論は私にはどうもよくわからない。まず「綱」の訓詁を二つに分ける必要はあるまい。それは人倫の大づなであって、『白虎通』自身の「綱者張也」の訓で一貫して通ずる。從ってその思想内容も一貫しており、終始君・父・夫の絶對性を説く。臣・子・妻の不可缺をいうのは、被支配者としての不可缺性であって、三者の立場を擁護するものでも相互性を主張するものでもない。支配者はその存在のためには被支配者を必要とする。その支配理論として陰陽説が

導入されているのである。自然觀としての陰陽說と政治論におけるそれとを混同してはならない。また道義性の要求は、君父の一方的支配權を弱めるものではない。君父の絕對性を確定承認した上での理念を述べているにすぎない。法家を儒家で潤色するというのはまさにそのとおりだが、君主の道義性は禮敎國家の看板としてむしろその權威を強化するものであり、その意味での潤色なのである(『繁露』基義篇においても事情は同樣である。著者は恐らく董仲舒に君主權抑制の思想ありとする通說に據っているのだろうが、この通說自體再檢討の餘地がある)。さらにまた、君と父・夫の相互關係について詳しい考察がなされているが、これもややくどい感じがする。歷史的には確かに著者のいうとおりであり、『白虎通』でも他の篇では君父の間に緊張が生じているが、本篇ではそういった歷史的變遷を顧慮し、深い思索を行っているわけではない。ここでは、この三綱によって人倫の全てが秩序づけられるといとも簡單に考えられているのであって、三者相互の間に矛盾が生じることなどはないから想定されていないのである。歷史的考察と、對象自體の思想構造の考察との分離がやや不明瞭である。

第二節は、「曲學阿世」とも貶される古文派の大物賈逵について、上奏文や『左傳』注に卽しつつその思想と人物を具體的に檢討し再評價せんとするものである。賈逵は周知のごとく『左傳』を君父に深きものとして支持するが、實は『穀梁』や『公羊』にも通じており、『左傳』解釋にもそれを用いている。このような幅廣さは古文家の特色であるが、それはまた政治思想としても柔軟さとして發揮されており、一方的な肯定否定は見られない。すなわち賈逵は、「上下秩序を嚴守しつつその枠內で儒家の理念を柔軟に生かそうとし」「儒家の敎說を守りながら融通性を持って體制社會に適應しよう」(一四五頁)としたのである。また讖緯に對しても實は熱心な支持者ではなく、「讖緯の實體を精確に把握した上でこれを效果的に利用した」(一四七頁)にすぎない。さらに彼は、現實逃避者にも理解を示しているが、自身はあくまで現實において有爲であらねばならない儒家としての信念を有していた。

本論は地味ではあるが讀みごたえのある重厚な力作であり、著者の思想硏究のあり方をよく示した代表作と評價したい。本論のごとき丹念な檢證と多面的な思索こそ本物だと思う。今文・古文、合理主義・神祕主義などのレッテル貼りがいかに無意味であることか、本論を讀めばよくわかる。ただその多樣性の故であろうか、私にはやや行きすぎと感じられる點も少しある。たとえば、當時の知識人は實は讖緯に對して冷やかであったと一般化すること、あるいは注の「無憂」ということばを『老子』に基づくものとして隱逸を肯定したとすることなどである。

第三節は『五經異義』の檢討を通して許愼の思想と立場を探求したもので、その方法はほぼ前節と同一である。檢討されているのは親迎・逆祀・純臣・世卿・感生帝等の問題であるが、結論として、「許愼は、全般的に古文學說に立脚しながら、時には自己の判斷に基づく自由な解釋も下し、又、その全體の解釋が實證的であった。彼は後漢の統治機構と結びつく今文派の主張を批判すると思われた」(一六七〜八頁)という。そして『說文』では今文說と妥協的に見えるところがあるが、それは現象をあるがままに解するより高次の客觀性に進んでいるためとする。

本論も着實な內容である。許愼の學問の性格の規定については、

私も大體贊成である。が、許愼の根本的思考樣式、換言すれば各經說を根柢で支えている獨自の論理はなお完全には明らかではない。多樣性という廣がりは十分だが、それが一つの論理に收斂していないのである。文章もやや晦澁で、行論に若干明快さを缺く。（これは他論でも感じることだが、本論と次の第四章第一節ではそれが顯著である。）これは對象の性格上やむを得ないことでもあり、矛盾を矛盾としてあるがままに對應しようとする著者の態度によるものではあるが、もう一歩突っこんで、たとえば鄭玄との思考樣式の差異などを明快に論じてほしかった。また『說文』を客觀的とすること、私も反對ではないが、著者の論證だけではなお不十分であり、さらなる補強が望まれる。さらにまた、繰返し述べてきたことだが、本論でも今文說＝外戚擁護、古文說＝外戚批判という圖式、すなわち各學說を時の統治階級とストレートに結びつけるやり方が強すぎる。思想を一一現實の政治機構において意味づけることが、思想史研究の全てではあるまい。思想・學問を思想・學問として把え、その獨自の體系を考求する視點ももう少し必要ではなかろうか。なお、「未踰年之君、立廟不」に關する議論（一六六頁）は、誤って今文說と古文說を取違えている。つまり左氏說が立てるとするのであって、許愼はやはり古文說に從っている。

第四節は、「發墨守」等三篇における何休批判を通して鄭玄の思想の特色を考察したものであり、やはり前二節と同じ路線の上に立つ。まず何休の說を自らの立場に卽して折衷的に取入れていること、およびそれが現實的な考慮によるものであることを述べ、次に何休に反對する場合を詳述し、何休の理想主義に對して、やはり現實的・實務的考え方を示しているという。そしてこの三篇が黨錮中に書かれたことから、當時の黨人派の現實的考え方がここに反映しているとする。

ここでもやはり「現實的」ということが氣になる。明・章帝期を理想とすることが現實的であるかどうかは姑く置くとして、三篇を現實的とのみ評することにはいささか躊躇せざるを得ない。實務的と見えることは確かであり、それを鄭玄の春秋學の性格として抽出したのはすぐれた功績ではあるが、その實務性の背後には彼の描く禮の王國が構想されているのではないか。その現實性は理想に根ざした現實性であり、當時の社會狀況と直結させるだけでは一面的ではあるまいか。もし現實にのみ目を向けているとすれば、ほぼ同時期に著された『三禮注』の立場と不調和を生ずることになろう。著者は、『三禮注』は最後まで加筆修正され、晩年までの思想の蓄積があるというが、『鄭志』によれば、むしろほとんど修正されなかったとみるべきである。また荀悅や崔寔との關連を說くが、比較としては大變おもしろいけれども、直接的影響をいうのはやや短絡的と感ずる。

ここまでで、與えられた紙幅をすでに超えてしまった。まことに殘念ながら、以下二章の紹介は割愛せざるを得ない。とくに何休は、著者が最近とりわけ力を注いでいるだけに心殘りである。しかし以上の紹介だけでも、本書の特色・意義はほぼ明らかになったと思う。著者の誠實で眞摯な探求は、漢代思想研究者のみならず、思想史研究に從事する全ての者にとって熟讀・追體驗するに値するものと確信する。個人的なことになるが、評者にとって本書所收の諸論は常に導きの燈であった。言いつくせぬ學恩に謝するつもりで、

敢て獨斷的感想を陳ねた。著者の再度の教示を乞い願う。

なお本書の書評として、薄井俊二氏（「九州大學中國哲學論集」第十三號、一九八七年十月）と大久保隆郎氏（「集刊東洋學」第五九號、一九八八年五月）のものが發表されている。あわせ參照されたい。

一九八六年一〇月　東京　研文出版
A5版　三五三頁　七五〇〇圓

坂野正高著
中國近代化と馬建忠

林　要　三

一

本書は高名な中國近代外交史研究家としての著者が、一九七〇年代の初めから約十年間に逐次發表してきた馬建忠關係の論文に多少の補訂をくわえてまとめたもので、論文四編、解題附き翻譯一編とからなっている。

馬建忠はわが國ではよく知られているわりにはあまり研究がなされず、これまで中國近代外交史研究の一環として馬建忠の活動に言及されるか、あるいは洋務運動研究の一環としてその改革思想が取り上げられるにすぎなかった。

著者はこうした狀況にたいし、近代化過程におけるプロフェッションすなわち專門家職業集團のもつ重要な意義に注目し、こうした問題關心から、「李鴻章幕下の有力なるサブ・リーダーの一人としての馬建忠の思想と行動と挫折の全體を一九世紀後半の中國の政治社會というコンテクストの中で包括的に跡づけること」により、「『傳統主義的』な舊中國の政治・社會・經濟の苦澁にみちた變動の過程を明らかに」（五ページ）しようとした。こうした研究はこれまでだれも試みたものがなかった。本書は從來の類型化した馬建忠研究に新風を吹き込んだばかりか、今後のわが國の洋務運動研究、中國